

「親密なるスラヴ民族」

—— 水上パレード企画に見る総合芸術家としてのムハ

小野 尚子 (大阪大学)

本発表は、アール・ヌーヴォーのポスター画家として知られてきたアルフォンス・ムハ (Alfons Mucha, 1860-1939) が祖国チェコで総合演出を手掛けた水上パレード「親密なるスラヴ民族」を取り上げ、近年公開された習作群やプラハ装飾美術館所蔵の一次資料などに基づいてこのパレードを再構成するとともに、総合芸術家としての新たなムハ像を提示するものである。

近年、ムハによる民族主義的な作品群を対象とした研究が盛んになってきている。特にテンペラ画 20 枚から成る連作《スラヴ叙事詩》は、画面構成や装飾的要素、劇場芸術に通じる臨場感とアピール性、そしてムハ独自の世界観が投影されている点において、まさにムハ芸術の集大成であり、これらの研究の中核を成す。また、この連作と並行して制作された作品の多くが《スラヴ叙事詩》と共通の主題を持つことから、それらは《スラヴ叙事詩》研究に不可欠なものとなっている。特に注目すべきは、1926 年に行われた国民的体育大会、第 8 回ソコル大会初日の夜にプラハで催された「親密なるスラヴ民族」という水上パレードである。このイベント自体は嵐で中断、大失敗に終わったこともあり、ごく最近までほとんど研究されていなかったが、2005 年の『アルフォンス・ムハ―親密なるスラヴ民族』展で、ムハによる 56 枚の習作スケッチが初めて一般公開されるなど、ようやく研究が進み始めた。「親密なるスラヴ民族」においてムハは、竜や象を模した大小様々な船、歴史的衣装を身に纏った人々、また光と音楽も駆使して、スラヴ民族の歴史と伝説に取材した 5 つの主題を、ブルタヴァ川と中州に設えられた大舞舞台上に寓意的に表現した。そのうち 4 つの主題は《スラヴ叙事詩》と共通するものであり、パレードの台本からは、《スラヴ叙事詩》に描かれた歴史上の人物達が、いきいきと立ち振る舞う様子が窺われる。このパレードはいわば《スラヴ叙事詩》の世界を演劇的に再現した、瞠目すべきものだったのである。

ムハによる習作スケッチ以外、「親密なるスラヴ民族」に関する画像資料はまだほとんど発見されていないが、諸資料をもとにこのパレードの全貌はある程度再構成できる。また、パレードの企画においてムハが大きく影響を受けたと思われるマッカルト・パレード (1879 年ウィーン、ハンス・マッカルト企画) との比較からも、ムハの企画の意図や総合芸術家としての特質を窺い知ることはできる。

演劇的、劇場空間的要素と絵画を総合するという総合芸術家ムハの試みは、「親密なるスラヴ民族」の企画・演出を通じて洗練されて行った。そして、絵画空間に劇場的要素を導入することでいきいきとした臨場感を創りあげ、作品の世界観をより効果的に鑑賞者へ伝えるという《スラヴ叙事詩》特有の独創的表現もまた、「親密なるスラヴ民族」の実現によってムハが獲得していったものに他ならなかったのである。